

通園バスに関する保育者の考えと課題

Child Care Worker's awareness and their issues of kindergarten bus

西村 実穂
NISHIMURA Miho

要旨

幼稚園への通園手段である通園バスの利用状況及び通園バスについての保育者の考えと課題について明らかにすることを目的に、幼稚園教諭に対する質問紙調査を実施した。バスの運行状況としては複数のコースが設けられ、運行時間は長時間に及んでいることが明らかになった。保育者は、バス乗車による体力的な負担が生じることや、保育時間の差が生じるといった問題に加え、乗車時のルールを守らない保護者がいることを問題とらえていた。特別なニーズのある子どものバスの乗車に関しては、多動な子どもが座ってられないという安全確保ができない状況を危惧する保育者が多かった。このような状況から、保護者はバス通園の利点と欠点を理解したうえで通園手段を選択する必要があると考えられ、保育者にはその子どもに合った通園手段が選択できるよう、保護者への情報提供が求められると考えられた。

キーワード：通園バス 幼児バス 幼稚園バス 特別なニーズ 障害

1. 問題の所在と目的

現在、幼稚園における通園手段のひとつとして通園バスが利用されている。通園バスに関しては、長時間の乗車によって子どもの体力的な負担があることや、保育時間が短くなってしまうこと、また、保護者と保育者のコミュニケーションの機会が少なくなることなどが問題であると指摘されてきた(多田, 1961; 八幡, 1999)。近年、幼稚園では障害児や医療的ケアの必要な子ども、慢性疾患の子どもなど、特別なニーズのある子どもの受け入れが増加しており、現場の保育者から特別なニーズのある子どもの乗車に際して判断に迷うケースが生じているとの声がある。具体的には乗車時に障害児と他児とのトラブルが生じることや、安全が確保できないことを理由に乗車を断るケースである。ここから従来とは異なる課題が生じていることが予測されるが、近年の通園バスに関連した研究は少なく、どのように通園バスが運行されているのか、通園バスに関してどのような課題があるのかといった現状が明らかになっていない。

そこで本研究では保育者は通園バスに関してどのような考えをもち、課題があると感じているのか、また特別なニーズのある子どもの乗車に関する問題が生じているのかについて明らかにし、通園バスに関する課題を整理することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者

東京都および埼玉県内の幼稚園に勤務する幼稚園教諭を調査対象とした。

(2) 手続き

東京都、埼玉県において開催された幼稚園教諭対象の研修会において、無記名の質問紙調査を実施した。研修会開始時に質問紙を各園に1部配布し、その場で回答してもらい、103園から回答を得た。質問紙の正確な配布数が不明であるため、回答率は不明である。そのうち通園バスを利用している95園の回答を分析対象とした。なお、調査への協力は任意であり調査に協力しないことによって不利益が生じることがないこと、回答の途中であっても回答をやめることが可能であること、回答はすべてデータ化して処理するため、回答した個人が特定されることはないことを口頭と書面により説明し、回答が得られた者に回答してもらった。

(3) 調査内容

幼稚園の概要（4項目）、通園バスの利用状況（8項目）、保育者の通園バスに関する考え（3項目）の計15項目であった。

(4) 調査期間

2011年7月であった。

3. 結果

(1) 幼稚園の概要とバスの運行状況

回答者の勤務する園は私立幼稚園がほとんどであり（99%、94園）、公立幼稚園が1%（1園）のみであった。在園児数は平均240（±100）名であった。

勤務する園における特別なニーズのある子どもの在園状況を尋ねた（表1）。なお、本研究において慢性疾患とは糖尿病、腎臓病、心臓病、小児ぜんそく、アレルギー等の疾患とすることを調査時に明記した。在園する割合が最も多いのが発達障害のある子どもであり、慢性疾患のある子ども、知的障害のある子ども、身体障害のある子どもが続いた。

表1. 在園している特別なニーズのある子ども（選択式）

発達障害がある子ども	56% (58園)
慢性疾患がある子ども	51% (53園)
知的障害がある子ども	23% (24園)
身体障害がある子ども	17% (16園)
特別なニーズのある子どもは在園していない	8% (8園)
(%の母数は有効回答数95園) (複数回答)	

表 2. 全園児数に占めるバス利用児の割合

20%未満	1% (1園)
20～30%未満	8% (7園)
30～40%未満	12% (11園)
40～50%未満	21% (19園)
50～60%未満	20% (18園)
60～70%未満	16% (15園)
70～80%未満	11% (10園)
80～90%未満	10% (9園)
90%以上	1% (1園)

(%の母数は有効回答数91園)

表 3. バス保有台数 (自由記述式)

0 台	2% (2園)
1 台	9% (8園)
2 台	33% (31園)
3 台	33% (31園)
4 台	12% (11園)
5 台	7% (7園)
6 台	4% (4園)
7 台	1% (1園)
11台	1% (1園)

(%の母数は有効回答数94園)

表 4. 通園バスに実施している工夫 (自由記述式)

バスの車体にイラストが描かれている	88% (59園)
バスに愛称をつける	12% (8園)
バス車内にイラストを貼っている (描いている)	7% (5園)
バスの車体の形に工夫している	4% (3園)
その他	1% (1園)

(%の母数は工夫の内容を回答した67園)

全園児数のうち通園バスを利用する園児の割合を算出した (表 2)。表 2 より、58%と約 6 割の園において園児の半数以上がバスを利用して通園しており、通園バスが主要な通園手段となっていることがわかる。また、バスの保有台数を尋ねたところ (表 3)、ほとんどの園は自園でバスを保有していたが、バスを自園で保有せず、リース契約をしているという園も 2 園みられた。

子どもが通園バスに親しみをもてるような工夫をしているかどうかを選択式で尋ねたところ (表 4)、工夫をしている園が75% (71園) と多くを占めた。工夫をしていると答えた園に対して自由記述式で工夫の内容を尋ねたところ、最も多いのは「バスの車体にイラストが描かれている」というものであり、88% (工夫の内容を答えた67園のうち59園) の園が実施していた。動物のイラストや花のイラストといった回答が多かったが、なかには園のキャラクターや、卒園児の絵、園庭のイラストなど、園にゆかりのあるイラストを描いているという園がみられた。このほかアンパンマン、ディズニーのキャラクターといった子どもが好むイラストを描いている園もあった。またライオン号など、バスに描かれているイラストにちなみ「バスに愛称をつける」という回答が12% (8 園)、「バス車内にイラストを貼っている (描いている)」が 7% (5 園) みられた。

バスのコースを尋ねた結果を表 5 に示す。最もコース数が少ない園では 2 コース、最も多い園では 18ものコースがあると回答しており、平均では6.3 (±3.4) コースという複数のコースを回り子どもを送迎していることが確かめられた。バスの保有台数は 2 台か 3 台という園が多いことから考えると、1 台のバスが 1 つのコースだけをまわるのではなく、複数のコースをまわっていることが推測される。どのコースのバスに子どもを乗せるのか、間違えずに指示をしなければならず、バスによる送迎をするために保育者が非常に気を使わなければならない状況があることが推測できる。

表5. 通園バスのコース数 (自由記述式)

2コース	10% (9園)
3コース	5% (5園)
4コース	18% (17園)
5コース	9% (8園)
6コース	21% (19園)
7コース	8% (7園)
8コース	10% (9園)
9コース	4% (4園)
10コース	2% (2園)
11コース以上	13% (12園)

(%の母数はコース数を回答した92園)

表6. バスの運行時間

(自由記述式)

	最短のコース	最長のコース
20分未満	7% (6園)	0
20分以上30分未満	26% (24園)	0
30分以上40分未満	45% (41園)	16% (15園)
40分以上50分未満	14% (13園)	23% (21園)
50分以上60分未満	0	22% (20園)
60分以上70分未満	5% (5園)	23% (21園)
70分以上80分未満	0	9% (8園)
80分以上90分未満	0	2% (2園)
90分以上	2% (2園)	4% (4園)

(%の母数は運行時間を回答した91園)

表7. 通園バスの運転の担当者

(選択式)

園で雇用している運転士	82% (78園)
派遣会社から派遣されている運転士	31% (29園)
園長などの管理者	8% (8園)
保育者	8% (8園)

(%の母数は有効回答数95園)

バスが園を出てから戻るまでにかかる時間を尋ねた結果を表6に示した。バスの運行コースが複数ある場合には、コースによりかかる時間に差があることが考えられるため、最短のコースの場合と最長のコースの場合、それぞれのくらいかかるかを尋ねたところ、最短のコースの場合の平均が31(±15)分、最長のコースの場合が平均51(±18)分であった。最短のコースでは40分未満で園に戻ってくる場合が半数以上を占めていたが、なかには園を出てから戻るまでに60分以上かかるという園が7園あるというように、園によるばらつきが見られた。最長のコースでは60分以上かかる園が約4割見られ、最も長時間乗車しているケースでは120分という回答が見られた。

バスの運転の担当者を尋ねたところ、園で雇用している運転士が8割以上(82%、78園)と最も多くを占め、派遣会社から派遣されている運転士という回答が31%(29園)とバスの運転を専任で担当する職員が担当していることが多いことが明らかになった。しかし、園長や保育者という園の運営や保育を担当する職員がバスの運転を兼任しているケースもそれぞれ8%(8園)みられた(表7)。

園児の保護者が通園バスへの乗車を希望した際に、バスに乗車することを断ることがあるかどうかを選択式で尋ねた(表8)。バスの乗車を断ることがあるという項目を条件別でみると、身体障害がある場合(8%、8園)に乗車を断ることがあるという回答が他の項目と比べて多かったが、いずれの理由においても乗車を断ることがあるという回答は1割以下と少なかった。「場合による」という回答が多いのは体調不良である場合(21%、20園)、発達障害がある場合(15%、14園)、身体障害がある場合(14%、13園)が続いた。断らないという割合が多いのは家が園の近くにある場合(77%、73園)、慢性疾患のある場合(77%、73園)であった。

表 8. 通園バス乗車を断る場合

(選択式)

	断る	断らない	場合による	無回答
身体障害がある場合	8 % (8 園)	61% (58園)	14% (13園)	17% (16園)
家が園の近くである場合	6 % (6 園)	77% (73園)	9% (9園)	7% (7園)
発達障害のある場合	5 % (5 園)	68% (65園)	15% (14園)	12% (11園)
体調不良の場合	5 % (5 園)	68% (65園)	21% (20園)	5% (5園)
知的障害のある場合	4 % (4 園)	68% (65園)	11% (10園)	17% (16園)
慢性疾患のある場合	3 % (3 園)	77% (73園)	7% (7園)	13% (12園)

(%の母数は有効回答数95園)

(2) 通園バス利用についての保育者の考え

通園バスの利用についての保育者の考えを尋ねた (表 9)。「通園バスの中では異年齢や他のクラスの子どもが交流できる場である」(71%、73園) が最も多く、「通園バスの中は子どもが生活習慣や乗車のマナーを学ぶ場である」(61%、58園) が次いだ。通園バスを使用しているが、「子どもにとっては親が送ってきた方が通園バスを使うよりもよい」(24%、23園) と考える者も少なからずいることが明らかになった。

表 9. 通園バス利用についての考え

(選択式)

通園バスの中では異年齢や他のクラスの子どもが交流できる場である	77% (73園)
通園バスの中は子どもが生活習慣や乗車のマナーを学ぶ場である	61% (58園)
保育者は通園バスの中で子どもが楽しく過ごせるような工夫をした方がよい	38% (36園)
保育者は通園バスの中で子どもが静かに過ごせるよう見守っている方がよい	31% (29園)
子どもにとっては親が送ってきた方が通園バスを使うよりもよい	24% (23園)

(%の母数は有効回答数95園)

(複数回答)

(3) 通園バスに関する問題

通園バスに関して園で問題になっていることを選択式で尋ねた結果を表10に示した。最も多いのは「バスの乗降の際のルールを守らない保護者がいる」(49%、47園)、次いで「乗車時間が長いために子どもが疲れてしまう」(34%、32園)、「バスのコースによって保育時間が大きく異なる」(33%、31園)であった。また、「バスに酔う子どもがいる」(20%、19園)という回答と同程度、「バスに酔う保育者がいる」(19%、18園)という回答がみられた。

表10. 通園バスに関して問題になっていること (選択式)

バスの乗降の際のルールを守らない保護者がいる (予定の時間に迎えに来ない等)	49% (47園)
乗車時間が長いために子どもが疲れてしまう	34% (32園)
バスのコースによって園への到着時間、園の出発時間が異なるため保育時間 が大きく異なる	33% (31園)
バスの中で寝てしまう子どもがいる	23% (22園)
保護者と保育者が接する機会が少なくなる	22% (21園)
バスに酔う子どもがいて対応に困る	20% (19園)
バスに酔う保育者がいる	19% (18園)
多動な子どもがバスの中で座ってられない場合がある	17% (16園)
乗車時間が長いために保育者が疲れてしまう	15% (14園)
バスの維持に費用がかかりすぎる	14% (13園)
バス内で障害のある子どもと他の子どもとの間でのトラブルが生じる	11% (10園)
体調を崩した子どもに適切に対応できない	7% (7園)
バスの中でパニックをおこしてしまう子どもに対応できない場合がある	3% (3園)
バスの走行中のルールを守らない保護者がいる (バス内で食事や着替えを要求する等)	2% (2園)
慢性疾患のある子どもが乗車中に具合が悪くなる	1% (1園)
問題は生じていない	9% (9園)
(%の母数は有効回答数95園)	(複数回答)

特別なニーズのある子どものバス乗車に関する問題についてみると、「多動な子どもがバスの中で座ってられない場合がある」(17%、16園) が最も多く、「バス内で障害のある子どもと他の子どもとの間でのトラブルが生じる」が11% (10園) みられた。しかし、通園バスに関する問題全体のなかでは少数であった。

(4) バスの添乗についての保育者の考え

バスの添乗についての保育者の考えを尋ねたところ (表11)、通園バスに添乗する時には「子どもを安全にミスなく送り届けなければならないので気をつかう」(88%、84園) という回答が最も多かった。また、「園内とは異なる雰囲気の中で保育ができるので保育者にとってバスに乗ることは楽しみである」(23%、22園) という肯定的な考えの者がいる一方で、「バスの中では保育者が少ないのでトラブルが起こった時に不安である」(29%、28園)、「バスに添乗することは保育者にとって体力的に負担が大きい」(25%、24園) といったバスの乗車を負担に感じている者や「できれば通園バスに添乗したくないと思う保育者は多い」(17%、16園) とバスへの添乗を避けたいと考える保育者が少なからずいることが明らかになった。

表11. 保育者の通園バスへの添乗についての考え (選択式)

通園バスに添乗する時には子どもを安全にミスなく送り届けなければならないので気をつかう	88% (84園)
バスの中では保育者が少ないのでトラブルが起こった時に不安である	29% (28園)
バスに添乗することは保育者にとって体力的に負担が大きい	25% (24園)
園内とは異なる雰囲気の中で保育ができるので保育者にとってバスに乗ることは楽しみである	23% (22園)
「できれば通園バスに添乗したくない」と思う保育者は多い	17% (16園)
バスの中では教室とは異なる条件で子どもを楽しませる工夫をしなくてはならないので大変である	6% (6園)
(%の母数は有効回答数95園)	(複数回答)

4. 考察

(1) 通園バスの運行状況

半数以上の園児がバスを使って通園している園が約6割あり、幼稚園にとって通園バスは多くの園児が利用する通園手段であることが確かめられた。また、本調査においてバスの運行時間が40分以上である園は83%にものぼっており、長時間の乗車をしている園児が多いことが推測できる。朝倉(2008)による小中学生を対象とした通学と健康に関する調査によれば、バス通学をしている場合、乗車時間が40分以上になるとストレスを感じるようになる可能性があると言われている。小中学生よりもさらに低年齢である幼稚園児にとって長時間の乗車によるストレスが生じる可能性は高く、バスの乗車時間の見直しが必要であると考えられる。

9割以上というほとんどの園は自園でバスを保有し、8割以上の園において専任の運転士が雇用されていた。さらに、7割という多くの園では車体に絵イラストを描くといった工夫がなされていた。ここから多くの園においてバスに親しみをもてるような工夫をしている一方で、バスの維持や運行には多くの費用がかかることが予測される。それでもなお自園でバスを保有する背景には、通園バスが子どもの通園のための手段という側面だけでなく、園名をつけたバスが地域内を走ることにより、走行する地域に対して幼稚園の存在をアピールする手段という側面ももつことが考えられる。

(2) 乗車の可否と特別なニーズのある子どもの乗車

①乗車の可否

子どもが体調不良の場合であっても乗車を断る園は少数であった。体調が悪いまま乗車すると、車内で子どもが体調を崩してしまう。さらにバスの車内は閉鎖された空間であり、感染が起こりやすい。長時間乗車する場合には、感染の可能性が高まる。咳やくしゃみがある場合など、感染症が疑われる場合には乗車を断るなどの対策が必要であると考えられる。

断らないという回答が多かったのは、慢性疾患のある場合と家が園の近くである場合であった。

体調不良児については、ぜんそくやアレルギー等の慢性疾患の子どもが多く、保育者も対応になれていることが推測できる。そのため乗車を断る理由となりにくいことが考えられる。家が園の近くである場合については、徒歩での通園が可能であっても、保護者が希望すればバスでの通園が可能になるということである。通園バスによる送迎が幼稚園による保護者へのサービスの一環となっており、

幼稚園が保護者のニーズに答えようとしている様子がうかがえる。

②特別なニーズのある子どもの乗車

特別なニーズのある子どもの乗車の可否について、乗車を断る場合がある割合が最も高いのは身体障害児であった。また「(乗車できるかどうかは) 場合による」という回答が多く、園側が乗車の判断に悩む様子がうかがえるのは発達障害児と身体障害児のケースであった。身体障害児のなかには、乗車時に姿勢を保持することが難しい子どもがいる (Nishidate, 2008)。車いすやクラッチなど移動のための補助具を使用している場合には、乗降に困難が生じたり、車いすを車内に安全に固定するための場所や装置が必要になる。このような設備がない場合には、バスへの乗車を断らざるをえない。また通園バスにはシートベルトを装備する法的な義務がないため、シートベルトのない通園バスが現在多く使用されている。そのため乗車時にシートベルトを使って体位を保持することができず、安全の確保が困難となることが予測され、身体障害児の乗車を断るケースがあると考えられる。

広範囲からバスを使用して通学をする児童・生徒の在籍する特別支援学校では、通学時間が長時間に及ぶことにより身体障害児には脊椎の湾曲の進行といった負担が生じていることが指摘されており、バス乗車の人数を制限し、乗車時間を短縮するといった対策を講ずることが望ましいとされている (野田・鎌田, 2012)。幼稚園バスにおいても安全の確保だけでなく、身体への影響についても考慮し、バスへの乗車の可否を検討する必要がある。

発達障害児については、多動の子どもの場合、乗車中座席に座っていられず立ち歩いたり、衝動性の強い子どもの場合は周囲の子どもを叩いてしまうなど、乗車時にさまざまなトラブルが生じることが予測される。少数の保育者しか添乗していない車内において、これらの問題への対応が困難であると考え、発達障害児の乗車の判断をする場合に断るケースがあると考えられた。

(3) 通園バスに対する保育者の考え

①通園バスの利用についての保育者の考え

通園バスに乗車することにより他のクラスの子とも交流することや、マナーを身につけることができる」と答えた保育者が7割みられ、これらは通園バス乗車のメリットであると考えられる。しかし、バス以外の場であっても他のクラスの子とも交流したり、マナーを身につける機会を設けることは可能であり、これらのメリットは副産物的なものであるといえよう。また、車内での過ごし方として、楽しく過ごせるように工夫をすべきであるという意見が約4割、静かに過ごすべきであるといった意見が約3割見られた。

通園バスに関する考えを自由記述で尋ねたが、そこには「車内ではしゃべらないというルールを設けている」といった意見がある一方で、「手あそびやゲームなど、車内で楽しく過ごせるように工夫している」といった意見もあり、保育者や園の考えによって車内での過ごし方はさまざまであることがうかがえた。静かに過ごすというのは、ゲームをしてしまい、子どもたちが興奮して立ち上がるなど、安全に過ごせなくなってしまうといった懸念があるためと考えられる。しかし、長時間乗車している場合には、子どもが話をせずじっと車内で過ごすことは難しいと考えられ、乗車時間が長い場合には、子どもたちがバスの乗車を楽しむことができるよう、保育者が配慮をする必要がある。

②通園バスに関する問題

通園バスに関する問題として、多くの保育者が「保護者が乗車時のルールを守らないこと」を問題であると考えていた。近年、社会全体の規範意識の低下が生じている。全国国公立幼稚園長会（2010）による調査では、保護者は自分にとっての便利さを優先してものごとを考えていると指摘されており、バス乗車時にも、保護者が自身の都合を優先していることが考えられる。

また、子どもが寝てしまうことを問題と捉えている保育者は多くはなかったが、子どもが寝てしまうことは疲労の表れであると考えられる。園から徒歩で10分程度の距離であっても、バスのコースによっては乗車時間が1時間近くかかることもある。子どもの体力には個人差があるが、バスの乗車中ずっと寝てしまっているような状態であれば、バスを利用するのではなく、徒歩での通園をすすめるなど、子どもの疲労状況と保護者の要望のバランスを考慮する必要がある。

③通園バス添乗についての保育者の考え

乗車時には気をつかうという者がほとんどであり、通園バスの乗車に際して保育者が緊張している様子がうかがえた。安全面への配慮が必要であることは言うまでもないが、複数のバスコースがある幼稚園が多いため、園児を間違えずバスに乗せることにも保育者が配慮しなければならない。加えて保育者は子どもの様子を見るために後ろ向きに座ったり、頻繁に乗降する子どもに対応するため、じっと座ってられるわけではない。車内には保育者専用の座席が設けられていないこともある。さらに、複数のコースを回るバスに乗車する場合には保育者は子ども以上に長時間の乗車をしていると考えられる。体力的な負担を感じる保育者が25%と少なからずおり、心理的にも身体的にも通園バスへの乗車を負担に感じる保育者がいると考えられる。

5. 結論

多くの園において通園バスが利用されており、その運行時間は長時間に及んでいることが明らかになった。また保育者は、従来指摘されてきた長時間のバス乗車による体力的な負担や、保育時間の差が生じるといった問題に加え、乗車時のルールを守らない保護者がいることを問題とらえていた。特別なニーズのある子どものバスの乗車に関しては、多動な子どもが座ってられないという安全確保ができない状況を危惧する保育者が多かった。

このような状況から、保護者はバス通園の利点と欠点を理解したうえで通園手段を選択する必要があると考えられる。保育者にはその子どもに合った通園手段が選択できるよう、保護者への情報提供が求められる。場合によっては乗車人数を減らすといった、乗車時間を短縮するための方法を検討することも必要となる。そのうえでバスによる通園を選択した場合には、シートベルトの設置の検討など車内環境の整備とともに、特別なニーズのある子どもへの車内でのトラブルへの対応方法を明確にすること、ルールを守ってバスを利用するよう保護者に促す必要がある。

参考文献

- 朝倉隆司,「通学制限に係わる児童生徒の心身の負担に関する調査研究」, 週刊教育資料, 1166, 42-50, 2008
- 国土交通省,「幼児専用車の安全性に係る検討について」〈<http://www.mlit.go.jp/common/000204938.pdf>〉,
(最終閲覧日2012年10月31日) 2012
- NISHIDATE Arisa 'Research on safety of children with orthopaedic disabilities embarking and disembarking
parent's vehicles', *The Asian Journal of Disable Sociology*, 7, 52-64, 2008
- 野田智子・鎌田尚子,「特別支援学校肢体不自由部門に通学する中高等部生の障害と生活習慣の実態」, 北関
東医学, 62 (3), 261-270, 2012
- 多田鉄雄,「幼稚園のスクール・バス」, 幼児の教育, 60 (12), 2-5, 1961
- 八幡真由美,「保護者から見た園バス通園の実態と課題Ⅰ」, 明和女子短期大学紀要, 14, 81-92, 1999
- 全国国公立幼稚園長会,「子どもの心によりそい、規範意識の芽生えを培うプログラムに関する調査研究報告
書」, 全国国公立幼稚園長会, 16, 2010

Child Care Worker's awareness and the issues of kindergarten bus

NISHIMURA Miho

The objectives of this research is clarify what kind of problems teachers are aware of that are related to kindergarten buses, clarify whether there are problems related to children with special needs riding the bus, and organize the challenges related to kindergarten buses. To do this we used an anonymous questionnaire for kindergarten teachers.

Teachers perceived that it is more of a problem that parents do not follow the rules for getting on the bus rather than the physical stress of children from riding the bus for a long time or difference in school time. For problems related to children with special needs, hyperactive children cannot sit still so teachers are apprehensive about any situation where they cannot ensure children's safety. Some teachers feel tense and stressed about attending the bus because they must handle such children in the bus. In order to lessen the stress of teachers and improve the safety of children, it is necessary to consider the installation of seatbelts and procedures on how to handle the troubles in buses that are related to children with special needs.